

第9回（令和6年度第2回）府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和6年6月18日（火）午後2時～4時

2 場 所 府中駅北第2庁舎 3階会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員14名

池田和彦委員、市村忠司委員、上野和憲委員、江崎章子委員、榎本成子委員、
佐野洋委員、白信康委員、関川けい子委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、
長畑誠委員、中村洋子委員、福田豊委員、渡邊和子委員

※今関紘二委員欠席

(2) 職員5名

佐藤文化スポーツ部長、斎藤文化生涯学習課長補佐、武居生涯学習係長、
栗原主任、竹川事務職員

※平澤文化生涯学習課長欠席

4 報告事項等

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第8回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員拡大役員会資料（抜粋）

ウ 資料3 第8回提案のまとめ

エ 資料4 社会教育・生涯学習に関連する市内公共施設

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会拡大役員会について、参加した委員から報告があり、第5ブロック研修会の開催方法について委員の意見を聞いた。

5 審議事項

(1) 「これからの生涯学習を支える『公共』の役割について」

会長： 昨年度中間答申をまとめるに当たり、生涯学習センターの主にハード面で何が必要か、どんな機能が必要かということを議論した。今年度はその中で残された特にソフト面の課題について、前回は、地域の拠点である文化センターとの役割分担や地域の学びをどうやって活性化するかという視点が必要だということで話し合った。文化センターに、より

若い人が来るようにするにはどうしたらいいかということと、地域課題に取り組めるようにするにはどうしたらいいかということを話し合い、そこで一旦文化センターの話題は締めることとした。また、それを基に、生涯学習センターの役割を考え、洗い出していくという作業まで前回は行った。

中間答申の中で出されていたものでまだ残されている課題としては、一つは、府中市には生涯学習センターに限らず様々な生涯学習の場があり、そうした施設との連携をもっと考えていく必要があるという点である。もう一つは、生涯学習サポーターやファシリテーターという制度があり、自ら学びたいという人達を支援する制度があるが、活用しきれていないため、そういったものを強化することもこれからのセンターの役割ではないかということである。

生涯学習センターでの生涯学習や社会教育というのは、色々な人が集まって学んでいくプロセスを支援したり、そういう場を作るものだと思える。その「学び」というのは一体どのようなものか、ということについて、前回「学び」という言葉に焦点を当てて、委員皆さんの経験からいろいろな視点を出してもらった。

今日は、残された課題のうちの一つである様々な施設との連携、協働について後半に考えていく前に、前半は、前回の「学び」の議論について副会長の方で整理をしていただいた資料3を基に副会長から説明をしてもらい、その後質疑応答などで話し合っていく。

副会長： 資料3の前半2ページから4ページまでは資料1の前回の議事録の前半部分と同じである。5ページ目からがまとめた資料になっていて、前回意見のあった「学び」について、それらがどういう視点で意見が出たのかということをもとめている。

2. 1 社会行為の視点とあるが、この視点は見方あるいは性質、特徴などの意味で使っている。

表の一番右側に委員の皆さんの意見の表現を入れている。

主だった意見の表現を右の端に入れていて、真ん中は、その意見はどのような学習特徴を表しているのかということ想像できる範囲で記載している。一番左の短いキーワードは、こういう視点で前回議論したのではないかとこの視点を表すようなキーワードを記載している。

2. 1の学習のコストについては、いろいろな意見があり、有料のイベントもあれば、税金で運営されている各種センターでの学習もあるというところをとまとめた。

次に、場所に依存した学習があるという意見と、いつでもどこでもできるような学習があるというような表現もあったため、そうしたことをまとめて場所性とした。

場所があるなら時間に依存することもあるだろうということで三つ目は、夏休み冬休みの宿題のように毎年その時期になると発生する学習

と、通年いつでも発生する学習というような分け方で時間性とした。

浸透性というキーワードは、嫌でも学習しないといけないということを必然とし、必然に対しては任意の学習があるということで、その事例としては地域の困りごとの解決や、サークル活動など、してもしなくても生活はできるだろうということをまとめている。

6 ページ目、2. 2 学習枠組みとしてまとめたものとなっている。まず制度区分については、この審議会が社会教育の枠組みの中にあるということで、学校教育に対立していることを記載した。

教育事業と学習の「いつ」については、人のライフサイクルの間でどのような教育があるかを並べてみたもので、ここは前回出てきた意見はなかったが、リカレントとかリスクキリングのように新しいことを始めたときとか、仕事を辞めたときとかというような表現があったので、このように記載している。

次の生活時間については、上の表を横にしたものになっているが、今後他の施設の連携等を考える場合に、どのような生活時間をどの施設が担当するのかということもあるかと思うので、確認ということで挙げたものになっている。この中には前回の意見の表現は入っていない。

その次は社会集団における役割ということで受動的に学習する場合と、能動的に学習する場合を分けている。主にこの生涯学習審議会は能動的な学習者をターゲットにしていると感じているので、これも年齢を意識した学習の役割を考えると参考にとということでまとめたものになっている。

7 ページ目は、学習行為という視点で意見をまとめた。学習の動機や行動というキーワードで、意欲、学習の時間・場所、学習期間についてどのような意見が該当するのかというのを右に記載した。

意欲、意志的な学習行為として取り組むときにどのような時間・場所、期間があるのかということである。

次は、学習様式としてまとめていて、様式という表現が正しいかわからないが、学習の仕方のことである。着付けや料理教室のようなものを体験するという意見が出ていた。経験する、知覚経験を、真似をするということだけでなく、メディアを通じた学習という意見もあった。真似をするときは、暗黙にただ真似をするということはほぼなく、言葉を使ったインストラクションがあるため、メディア学習を含めるかどうかというのは難しいと思うが、ここではいわゆる手元に明示的な教科書やテキストがある場合とそうでない場合ということで分けた。

また、メディアの学習だけ、言葉による学習だけということで、講演会を聞いているような場合や、新聞読む、テレビを見る、本を読むというようなメディアを通じた学習の様式があるのではないかとということでこのようにまとめた。

最近疑似体験、疑似知覚ということでバーチャルリアリティとか拡張現実といったようなことも言われており、そうした疑似知覚をサポート

トする装置をつけた上で真似をしたり、メディアを使った学習をしたりということも考えられると思う。

次の学習環境については、学習者が個別に学習をするという場合と、集団で学習をするという場合がある。特に出された意見を書いていないが、出された意見の個々の内容から、個別か集団か、あるいは教師がいるかないかというような判断ができた。

その次の学習方向については、先ほどの教師あり教師なしとも関わるが、単に受動する場合とそれから能動的に学ぶ場合とコミュニケーションする場合があるだろうということで記載した。同じ興味関心の人と学ぶとか、同世代の人と学ぶというような場合やそれから1人で学ぶ、自分の趣味に関心だけを追求するというような意見もあった。世代、あるいはボランティア活動等もコミュニケーションが活発な学習だろうということでこのように分類した。

最後に、8ページのコミュニケーション距離について、2. 1の2つ目にあげていた場所性ともほぼ同じようなことだが、他の施設の連携とも関係すると思う。施設があって、その施設内で直接、近距離で学習をするということ、これは施設を使った学習あるいはその場所を指定して、そこに集まって学ぶ学習と言える。それから間接的な知覚というのは、離れていて直接には会わないが、コミュニケーション手段を使って学習をするということである。間接的な知覚と直接的な知覚の二つの区分で学習があると考え、このような視点を設けた。

前回、委員の皆さんから出された意見をこのような形でまとめたものとなっている。今後の施設連携やサポーター制度等の充実といったときに、どのような視点でどのような取組をすべきかを考えるキーワードとして利用していただければと思う。

会長： 最初に、私の方から質問だが、5ページの場所依存と場所非依存という、「依存」というのはこの場所でないとできないこと、その場所でないとできないという捉え方で良いのか。

副会長： 最後のコミュニケーション距離とほぼ同じことを言っているが、場所性というのは、この場所でないと学習ができないだろうという意識で書いた。学習をする場所として施設が確保されていて、それ以外のところではその学習できないというそれほど強い制限かどうかかわからないが、場所は学習を制限するというような意味での場所依存ということである。その結果としてコミュニケーション距離が生まれるともいえる。

会長： 講座を受けるとき、その講座をやるところに行かないと駄目という場合とオンラインで繋がばどこからでもよいという場合もある。その場所が生涯学習センターなのか、図書館なのか、あるいは郷土の森博物館なのかというところで変わってくることはあるか。

副会長：　そこまで考えて、施設連携を議論いただければと思う。

会長：　一言で場所と言うが、それぞれの場所の特性もあるということであろう。他には何かあるか。

委員：　前回の議論との関わりでいうと、前回の議論の半分は、文化センターをどう活用するかということだったはずで、文化センターでどういう学習をすべきかという議論が半分ぐらいあって、その延長で学習って一体何だろうとなったと思う。ということは後半の学習について考えるのは、文化センターでの学習活動や行為を引きずっている可能性があって、一般的な学習とは何かということももちろん含んでいたが、文化センターでの学習に関連したキーワードや表現が多かったのかと思う。なのでそこが気がかりで、かつ前半の文化センターでの学習活動や行為については、今回のこの学習を巡る視点というところに、どのように反映されているのかが私はわからない。

資料3については大変苦勞されたと思うが、網羅的であるがゆえに、若干平板的で、どれが重要なのか一読した限りではよくわからなかった。多分作りながら、ここが大切だと思いながらまとめたと思うが、その辺のウエイトの違いをこれからどういうふうに考えていったらいいのか。

また、各要素間や項目間の関わり、深い繋がりがある部分もあるのだろうが、それを分断して、新しい項目で整理をしたと思う。そこが少し見えにくい。今後の議論でこれをどういうふうに活用していくことを想定しているのか。

会長：　1点目について、私の中では前回の話し合いの前半と後半は分かっていたつもりだった。後半については文化センターのことに限らず、「学び」について皆さんの経験から出していただきたいというつもりで問いかけた。確かに、もしかしたら引き続いて考えた方もいるかもしれないので、足りないものはあるのかもしれない。

2点目については、皆さんに問いかけたいことではあった。

3点目、この中で我々は何を特に重視するのかということだが、「学び」というと、こういうことばかり考えがちだがこういうこともあるなど、多様な考えがあると思う。生涯学習センターを中心として、社会教育の中で市として支援すべきなのはこういう部分ではないかということを確認していく必要がある。これについて、まずこのまとめを作成された副会長に、どう感じたかを聞いてみたい。

副会長：　これはあくまで委員の皆さんから出された意見について、個別的な意見も、まとめたものも色々あったので、それを見た上でまとめたというのが実際のところである。特に何かに重点を置くということはない。こ

これは今後の議論を深めていくためにキーワードとして活用してほしいということ。私個人が重点的だと言うのではなくて、生涯学習審議会として、あくまで委員の方々の総意としての意見が文書に反映されることとなる。施設間の連携のときにも、このキーワードが、この観点とこの観点からすればどうだ、というような議論に使ってもらえれば幸いだということでもとめた次第である。

委員： 会長からの説明について、これからの議論は文化センターについての議論はなしというふうに考えて良いのか。ということはこの間の文化センターについての議論は何であったのかというところがよくわからないのが第一点。

副会長の説明についてもよくわかったが、言葉をグルーピングしてまとめる際、皆さんが提示されたワードに対して意味を認めて、それをまとめていく作業されたと思うが、その意味を認めるにはやはり副会長が、これは重要だ、取り上げなければ議論が抜けるのではないか、などという思いがあったのではないか。

副会長： 潜在的な思いはあったのだと思う。これをまとめる際に神経心理学という、脳の中で何が起きてるかを医者が書いた教科書のような本があり、それを数冊読んだ後だったということもあるかもしれない。知覚、真似をする、というような、言葉を使ったのもその反映だと思う。もう一つは生涯学習をリカレント・リスキリングで分けられることが多いが、長寿時代なのでリカレント・リスキリングが生涯学習の主だった要因になりつつあるのではないかということでもとめたものだ。

会長： 最初の指摘の文化センターについては、前回の議論で一旦止めて、今日出てきている皆さんの指摘も整理して答申の中に入れ込みたいと思う。最後に答申の内容を皆さんで議論するので、そのときに文化センターについて話されたことの中でまだ入っていないという点が出てくるかもしれない。そこでもう一度議論いただければと思っている。文化センターのあるべき姿とそこから出てくる生涯学習センターがやるべき機能については前回までの話し合いの中から出てきたものを、正副会長の方でも整理をして答申案の中に入れたいと思っている。それをもとに議論してほしい。

後半の話については、「真似る」という言葉から「学ぶ」という言葉ができていくという説もあり、私は学習様式という、言葉から学ぶだけではなく、真似をする、体を使う、体験をするということも学びとしてはとても大事だと思う。それは学習センターだけではできないことだと思うので、そこは押さえておく必要がある。

また、学習方向についてだが、生涯学習センターは、講座をやるということが中心になっているが、実はそうではない学びの方法もあるので

はないかと、双方向ということが書いてある。みんなで一緒に何かをやりながら学ぶというのもあると良いと思うので、そこも考えながら、議論していければと思う。

場所の話については、場所依存ということ、つまり生涯学習センターでなければならないことはもちろんあると思うが、他の施設でなければならないこともあり、その他の施設でなければならないことに対して生涯学習センターが何か連携できることがあるのかという視点も出てくる。

そういう意味でこの「場所性」というところと、私から見ると「学習様式」と「学習方向」というのがポイントだと思っている。副会長から出てきた、リカレント・リスキリングという考え方もこれから大事になっていくと思う。

他に大事なことや、この視点を持ってこれから話す必要があるということがあれば意見いただきたい。

委員： 今の段階でこれから先何をすべきかということと詰めていかなければいけない。いらないものは排除して、最終的に答申しなければいけないから、すっきりした形にしなければならない。

例えば、学習する側と、今日これから話をしようとしている施設相互の関係とといったものが右と左にあったときに、どのような分類があってどうやって線が引けるのか、もっとコアなところに突っ込んだ議論をしないといけない。特に今回言葉を分類していただいたが、リサーチをするときには、よく軸を立てると思う。2次元のポジショニングで相対的な環境を見るときにその軸はどうやって立てるのかというと、自分の好き嫌いなどで軸を作るわけではないはずだ。

実は数学的に数値を与えながら軸を作っていく。ただ言葉の分類をただで軸ができるかということ、非営利か営利かなど、誰が誰に対して何をするとときに生涯学習をどう考えるかといったときに、その軸が振れてしまう。軸の立てようがなく、考えようがない。

それをもう少し整理して、コアなところに手をつけたらどうかと思っている。

会長： あくまでこれは色々なものを取りあえず広げてみて、それを少し並べ替えてみたということなので、どこまで持っていくべきなのかどうかも私はわからない。学習の分類をすることがこの審議会の最終的な目的ではなく、生涯学習センターのこれからあるべき姿を考えるに当たって一つの参考にしてほしいということである。

委員： 先ほどの意見は私もかなり同感するところがある。しかし、会長副会長の意図するところは、これをいわば中立的にニュートラルな形で分類して見せて、我々が、これが大切だとか、これは不要だというような議

論をしていくことが期待されているのではないか。

軸を作るべきで、その際には数学的に値を与えて、客観的に軸を作るというようなニュアンスのコメントだったと思うが、実はその値を与えるというところに、もうすでに価値が入り込んでいて、その人の判断の要素が紛れ込んでいる。それがないと値を作ることはできない。それを我々がここでこれが必要だ、この分類はいらないとやっていくのかと思った。

会長： 私個人の意見では、場所について、生涯学習センターにとらわれない学びがあるはずだというのが1点、それからメディア学習、言葉で学べるもの以外の学びもたくさんあるはずだということ、そしてもう1つが単方向の一方的に教えられるのではなくて、双方向の学びもあるはずだということ。これは私が着目したい点だ。ただこれは私個人の意見なので、皆さんの方からや他にここは大事だということがあれば。

委員： その前にもう1点だけ確認をしたい。またいずれ文化センターの話に戻るという話だったので、これからの議論も文化センターに戻るということを念頭に置いて発言すべきか。

会長： 今回の諮問は、生涯学習センターの役割と機能なので、生涯学習センターの役割と機能を考えるときに地域の拠点である文化センターがどうあるべきか、そしてそれに対して生涯学習センターどうあるべきかというところで、今まで話をしてきた。今度は生涯学習センターと、他の生涯学習に関係する施設との連携という話なので、文化センターも念頭に置いてもいいが、別だとは思っている。ただ、話をしていく中で、例えば美術館と、もしかしたら文化センターが繋がってもいいかもしれないという話が出てきてももちろんいい。全く排除はしないが、基本は生涯学習センターと他施設との連携という話である。

委員： 文化センターは他施設の1つであるということでこれから議論していくということか。

会長： 今までは文化センターに焦点当てていたが、今度はあくまで1つということで行く。

さて、他にも何か気になることはあるか。私はあえてこのバーチャルの部分は話していなかったが、VR、ARなどこれからたくさん出てくるだろうという部分について。それもあるが、大事なものは直接的な体験ではないかという感じで私は考えていた。そうではないというご意見もあるかもしれない。また、私は双方向の学びが大事だと思っているが、その前に先生から教えられることも大事だという意見もあるかもしれない。

委員： 学習するというのは色々な手段がある。今あったようにVRもARも、インターネットもある。自分1人でもかなりできる。例えば英語は、自分1人だけでもかなり学習できると思う。生涯学習センターや文化センターがあるのは、市民との交流の場だと思う。交流をしながら何か学ぶということである。ここでまとめてあるような、場所から時間からたくさんあるのでこれを分類するのではなく、1人で学べるのではなく、市民の交流やそういうものに繋がるような学びを、ここで議論しなくてはいけないと思っている。

会長： 分類はしたが、これを全部我々が考えなくてはいけないのではなく、この分類した中で、この部分が大事なので重視しながらこれから話をしていくというようなことである。

今の話は、まさに双方向とか同じ仲間として一緒に学んでいく、学び合うということが、市として取り組むべきことではないかという意見だ。

委員： 私は1人でも学習できるというところが気になっていて、1人でもできるという状況は必ずしも整備されていない。学びの大切なところは、自分の動機に基づいて調べ、探索して考えていく。それを構築していくという作業が必要だが、それを職場や他の施設を離れてもできるのかどうか気になっている。例えばデータベースがどのぐらい整備されているのか、必要な資料や図書はきちんとあるのだろうかというところをサポートするのが市の役目であって、交流も大切だけでも、1人でもできることはやらないとは私は思わない。

会長： 1人でもできることはやらないという話と、1人でできることができない状態を何とかしなければならないというのは同じことを別の面から言っているような気もする。皆で学ぶことも大事で、1人で学ぶことも、それができていない状況なら、それは市として何とかしなければいけないということなので、別のことを言っているのではなくて、私から見たらどちらも大事だと思う。

委員： 私もどちらも大事だと思っていることは事実だが、先ほどの意見は、市としてやるべきことは交流の方だということだったので、それは違うのではということと言いたかった。

会長： 今出てきた話は、個人としての学びについて、学びたい、学ぼうと思ったときにそれがサポートできる体制があるのかという問いかけであった。

委員： 身体障害者や1人住まいの高齢者などの弱者に対して手を伸べるようなことも、資料の中に入れていかなくてはいけないかと感じている。

会長： 学びの弱者という視点は当然あると思うので、そういう人たちへどう支援ができるかということも生涯学習センターの役割かもしれない。そのような感じで、他の視点でも意見が聞きたい。

委員： 何人かから意見が出ていたが、やはり広すぎるので全部検討するとなると多分不可能である。皆さんが大事だと思っていることに対して優先順位をつけてまとめていくのが良いと思う。例えば先ほどの話の、個人にフォーカスするのか集団にフォーカスするのか、あるいは、両方となるのか。受動的に学びたい人を優先するのか、能動的に学びたい人を優先するのか。どの世代を対象とするのか。ある程度優先順位を決めないと、議論を進めるのは難しいと思う。生涯学習センターの機能というものもあるが、府中市として生涯学習を考えるときに、何にフォーカスするというのは、1つでなくてもいいと思うが、複数あげていくなら、ある程度視点を絞らないと進まないかもしれないと思った。

会長： 少しずつ絞られていて、いくつかの視点は出てきてると思うが、今の話の中でいうと、どういう世代の人たちにより注力すべきかということは今後話をしていく必要があるかもしれない。これからの社会、高齢化がどんどん進んでいくが、増えていく高齢者だけを対象に考えるのではなく、若い人たちがこれから社会を育て支えていくため、そういう人達のことにも考えないといけない。対象世代についても考えないといけない私も思った。

そういう意味では学校との協働というのも考えなければならない。協働の相手としての学校というのは、今回あまり話が出てきていないが、少し考えなくてはいけないかもしれない。

今話に出てきたような学習の場所、学習の様式としての知覚と言葉、それから方向性として双方向なのか単方向なのか、1人でやる学びなのか複数でお互いに学ぶことなのか、そして世代についてはどう考えていけば良いのかというのが出てきた。この辺りを我々1人ひとり心の中に入れておいていただきたい。

会長： ここからは、生涯学習に関係する市の様々な施設について、その施設と生涯学習センターがどう連携できるか、連携すべきかということについて資料4の施設の順番に話をしていきたい。

学びを促進していくために、生涯学習センターとしては何か連携すべきことがあるのだろうか、又はしなくていいという答えもあっても良いと思う。1つ1つ意見交換ができればと思う。

まず、1番の図書館について、目的がここに書いてある通りで、運営主体は直営ということになっている。中央図書館以外に地区の図書館が文化センターを中心にある。図書館だよりを見ると、図書館という場所が、実は単に本を貸し出すという場所だけではないとわかる。例えば、

おはなし会をやっていたり、講演会の開催報告もある。図書館としての中心は、図書を収集して貸し出すこと、市民の様々な学びの疑問に答えて助言をしていく司書のサービスが中心だと思うが、そこから派生した活動もやっている。

図書館はこうあるべきだという話だけだと、この審議会は専門的に議論する場ではないので、図書館はこうあるべきだがそれに対して生涯学習センターとしてはこういう連携ができるというような意見が何かあれば。

委員： 図書館についての説明で資料に足りていないもので、無料データベースの提供という重要な機能がある。これは新聞や雑誌のデータなどが検索できるが、通常個人だと多くのお金がかかるところなので、図書館を利用する者にとっては欠かせない機能である。

他にも視聴覚資料の提供というのがあって、DVDやCDも借りることができる。その月々に出されるCDのうちで、話題性がある価値の高いものを実にうまく選んで提供してくれている。これは芸術活動などに目配りの利く係の方が、様々な資料をベースにそういう選定をしているのだと思う。これは単なる文献的、文字的な知識の獲得ばかりでなくて、そういう芸術一般に対する活動支援も行っているというところが図書館のもう一つの重要な機能ではないかと思うので、説明の中には入れておいていただきたい。

また、資料にある調査研究を援助するレファレンスサービスはとても重要である。もう一つ記載されていないもので、図書館に研究個室というものがあり、4時間まで自分の研究室のように使えるスペースがある。パソコンを持ち込んで1人だけで調べものができたり、何か原稿を書いたり、重宝するスペースなのでそういう記載もあれば、図書館の活用についての皆さんのイメージが広がると思う。

生涯学習活動との連携だと、レファレンスサービスに関連して、司書の知見や知識をベースに、今、世界で読むべき書籍は何なのか、今我々が直面している社会的課題あるいは世界的課題について、司書の方がオリエンテーション的に文献の提示、場の設定をしていただくと、府中市に在住する方々の生涯学習意欲も、支援、サポートされるのではないかと考えた。

会長： 資料に書いてないことで大事な機能もあるということだが、そのデータベースが活用できるということ、視聴覚資料が活用できるということ、これは生涯学習センターとも繋がってくる話かもしれない。

後半の部分の、司書をうまく活用するという。その方の持っている様々な知識なりをもう少し一般の方に接しやすいようにする。実際に図書館に出かけて行って司書の方に話を聞かなければいけないのではなく、もう少しアクセスしやすく、今社会でこういうことが課題になっ

ていて、こういうものがあるということを司書の方から逆に発信してもらえるようなものがあったてもいいのではないかという意見だ。

委員： 実はそのことの大部分はもうW e bで情報を取ることがきる。司書も私達からの問いかけに対してW e b 検索して教えてくれることが多い。それは個人でもできるが、私がとても重宝するのは、やはり個人としての司書の立場から、こういう面白い本があるとか、こういう新しいものが出てきましたとか、そういう紹介をされることがとても役に立つ。

会長： そういうものを出前で生涯学習センターでやってもらうというのもあるかもしれない。

委員： 私は今ハイブリッドワークで、テレワークと出社を組み合わせっていて、おそらく中長期的に続くだろうと言われている。仕事でプレゼン資料を作るときに、官公庁のデータや企業のデータとかを調べもので使うので、先ほどの無料データベースが使えるというのはいいと思った。また、府中駅のすぐ北側に東京都の無料のテレワークスペースがありそこを利用することもあるが、図書館に研究個室があるということで、そういう場所があれば、仕事のある現役世代の人にとっても、役に立つ場所だと思って聞いていた。

委員： 私はもう退職したので研究室がなくなり、自分の書斎で何とかしようと思うが、図書館行くと周りに資料だとか文献がいっぱいあるので、そこからいっぱい借りて研究個室に取り込んでいる。そこでパソコンが使える、今はWi-Fiも使えるので、研究、検索、原稿書きには役に立つところとなっている。

会長： 先ほどの流れで言うと個人としての学びの分類になると思うが、社会人のまさにリカレント教育あるいはリスキリング教育に繋がる学びというのが図書館の機能としては大事なのではないかという話が出てきた。これは図書館単独の機能かもしれないが大事なポイントかもしれない。

委員： 先ほど弱者の視点ということもあったが、移動図書館ができないだろうか。生涯学習センターが図書館と連携をしながら、どこかの公園に何曜日の何時から行きますというようなことをする。本当は図書館まで行って本を読みたいと思っている高齢者や子育て中でなかなか外に出られないお母さん達、子ども達も、移動図書館っていうのがあったら、少しまた違った意味で充実した生涯学習になるかと思う。

委員： 図書館のホームページはかなり充実していると思っている。今はテー

マを入れるだけでも検索で出てくるようになっている。先ほど出たような、今話題の本、売れている本など、もう少しA Iを入れて、検索システムを充実させるというのが、これからの図書館の基本になっていくのではないかと考えている。また、先日府中の図書館で珍しい本を請求したら、目黒区の図書館から届いた。府中市の持つてゐる本だけでなく、他のところの本も借りられて、非常に充実している。これからはもっと、検索の領域を充実させてもらえると更によくなるのではないかと考えている。

委員： 中央図書館と地区図書館があるが、中央図書館だけが夜10時までやっていて、他の文化センターと一緒にところは午後5時で終わってしまう。5時過ぎて来られて、帰られる方も多いようだ。夜10時までとは言わないが、文化センターの図書館の時間も延長できないか考えるべきではないかと思う。

会長： 時間の問題は、文化センターの機能の方にも繋がってくる。

では市民活動センター「プラッツ」との連携について、目的は市民の地域課題の解決やよりよいまちづくりを促進するためということで、講座を通じた市民活動支援からコーディネートや交流機会の提供を行って協働のまちづくりを推進するという。運営主体は指定管理者が入っていて、場所は皆さんご存知のとおり。新しい施設で業務内容もここに書いてあるとおり、本当に多彩なことをやっていて、施設としてもかなり充実している。カフェ、コワーキングスペース、交流スペースなど、こうしたものはなかなか今まで市にはなかったものかもしれないので、大変先進的な施設だと思う。生涯学習の視点から、生涯学習センターとどう繋がっていけるのかという話だが、せっかくなので江崎委員の方から何か補足で話していただければ。

委員： 今ご紹介いただいたプラッツの施設だが、生涯学習センターとの連携ということでは、既にプラッツの登録団体で生涯学習センターの方でも活動されている団体がいる。どちらの施設でも登録されている団体は、それぞれの場所で団体としての活動のしやすさをうまく利用されていると思う。また、既に生涯学習フェスティバルの情報をプラッツの方でプラネットに提供するとか、情報発信のところで既に連携を今までもしている

会長： 情報発信では今既にお互いに協力し合っているということである。実際に両方使っている団体もあるということだった。そうしたことも踏まえた上で何か協働、連携できることについて、何かアイデアや意見があれば。

委員： プラッツは新しい施設だが、建てるときに想定されていた利用人数など、計画があったとしたら、想定よりも利用されているのかどうかわかるか。

委員： 月例の報告で市には利用人数を報告しているが、想定人数にそれが達しているかどうか、私の方では即答できない。協働まつり等では市民の方に多く利用していただいている、来館者数は増えているというのは市に報告している。具体的に何人というところまでは今申し上げられない。

委員： 会議室を使おうとしても大体埋まっていて使えなかった。これは結構なことだが、会議室以外のバルトホールなどもしっかり利用されていて、目論見通りだったら良いと思う。

委員： 有料の会議室は、私どもが予約の仕方を決めているというよりは、市で決めた形にのっとって運営をしている。月始めに開催している施設抽選日の時点で、バルトホールなどの施設はいっぱいになっていると聞いている。利用されたい方にはなかなか借りにくいという声もあり、そこは申し訳ない。

会長： 生涯学習センターとプラッツの両方に登録している団体があるということだが、どのぐらいの数かわかるか。

委員： プラッツそのものの登録団体は400団体以上ある。そのうち生涯学習センターにも登録している団体数は私の手元にはない。例えば悠学の会は生涯学習センターで長く活動されているが、プラッツの方でもパソコン講座なども常にやっていただいている。本当に両方で活発に活動していただいていると思う。

委員： 悠学の会としては、パソコングループが偶数月に~~1回パソコン~~スマホの勉強会をプラッツでやっている。他にもそういう講座がいくつかあり、連携協働という形で進めている。

会長： 基本的にプラッツは市民活動というくくりになっていて、何らか活動をしている。それは必ずしも学習活動ではない団体も多い。例えば環境や福祉、まちづくり、子どもに関してなど、様々な活動をされている団体が使用している。生涯学習センターの場合は学習というのが基本にはなっていると思う。その2つの協働とは何かといったとき、例えば学習センターで学んだ人たちが、地域で何らかの活動を起こしたいと思ったときに、プラッツの方に行った方がいろんな支援を受けやすいということがあるかもしれない。プラッツに相談に行けば似たような活動をしている団体のことを紹介してもらえるかもしれない。

一方で、逆にプラッツで活動してる団体がもっと勉強会をやっていき
たいとなった際、生涯学習センターに行くかどうか。生涯学習センター
には社会教育主事がいるので、そういう支援が本当は受けられるかもし
れない。そういう意味で、市民活動をするということと学ぶことは、か
なり繋がりがあっていると思っていて、そういう意味ではこの2つの間を行き
来するような団体が増えた方がいいのではないかと思う。それをどうし
たら実現できるのかということは考える必要があると思い、今両方に登
録している団体がどのぐらいかと聞いた。確認することが可能であれば
知りたいと思った。

委員： プラッツはスポーツ団体の総会などでも結構使っている。その際懇親
会もやるが、ケータリング業者が少ない。グリーンプラザがあったとき
は、下にお店があって、そこがケータリングしてくれた。今はコンビニ
から取り寄せたりして、飲食を伴う使用もしやすくなると良い。

会長： 私の方からもう1点質問だが、プラッツの職員と生涯学習センター職
員で交流はあるのか。

委員： 職員同士が日常の仕事の中でやり取りはするが、交流というのはない。

会長： 違う指定管理者がやっているから仕方ないのかもしれない。ただ、も
う少し何か交流があっても良いのではないかと思ったところだ。

では次に、3の男女共同参画センターフチュールについて、ここに書
いてあるように、正に男女共同参画に関する学習の機会並びに交流及び
活動の場ということになっている。学習室等の貸出しもあるが、同時に
様々な企画も行っている。フチュールのニュースレターを見ると、府中
市男女共同参画推進フォーラムの紹介がある。フォーラムでは様々な企
画があり、登録団体の講座を公開している。普段は会員制で登録団体が
活動しているが、このときはそれを公開にしているというもののようだ。
男女共同参画週間なので、会員以外の方も参加できる。パネル参加団体
というのもあるが、生涯学習センターの登録団体とは重なっているのか。

委員： ほとんど重なっていないようだ。

会長： フチュールと生涯学習センターとの協働というのは何が考えられるか。
それとも、それぞれ別々にやってもらえればいいのだろうか。もしかし
たら本当はこういう大事な講座があるが、これをここだけでやるのがも
ったいないから文化センターでやるということもあるかもしれない。

委員： フチュールは中河原にあるとのこと、初めて聞いたので、どういうと
ころか教えてほしい。

委員： 近所なのでわかる範囲で話すと、中河原駅からすぐのところにライフというスーパーがあり、その上にある。アクセスが良くて利用しやすい場所にあり、子どもがよく受験勉強で利用した。書籍の量は少ないが、静かに勉強できる。オープンスペースで学習ができ、会議室がいくつか併設されているので、会議室でそのフォーラムなどが開催されているようだ。一市民のイメージとしては、男女共同参画の施設ではあるが、普通に会議室とか、学習スペースとかがあるような、図書館の延長線上にあるような感じの施設という認識だ。駅のすぐそばにあり、アクセスが良いのが一番のメリットだと思う。

会長： そういう意味では生涯学習センター中河原版、あるいは文化センター中河原版というような使われ方をしているのかもしれない。そうだとしたらわざわざ男女共同参画センターと言わなくてもいいとなってしまうが。

委員： 元々は女性センターと言われていたところで、男女共同ということになった際に男女共同参画センターという名称に変わり、フチャールという愛称がついた。建物4階の1フロアがフチャールになっている。

会長： 次に4美術館との連携についてはいかがか。美術館は展示があることが基本だが、府中市美術館の教育普及活動を見ると、それだけではなくて、公開制作、美術鑑賞教室、創作活動等がある。ボランティア活動もやっている。場所は生涯学習センターの近くである。ここは、学びという意味では体を使う、五感を使うアーティスティックな学びということで、生涯学習センターで行う講座と比べると対極にある部分かもしれない。生涯学習センターにも美術系があるので、そこは重なっている。逆に、美術館にあれば、生涯学習センターにその機能はなくてもいいとも言えるかもしれない。ただ美術館には陶芸の機能はないということはあるので、絵画という意味だけで言ったら、そういう考え方もあるかもしれない。

様々な創作造形や絵画に関心のある方は、直接ここに行く。美術館はやはり見に行くものというイメージがあるので、そうではない機能があるということはまだあまり知られてないのかと思う。そういう意味でこの美術館の教育機能、学習機能という部分をもう少しアピールしても良いと思う。

(意見なし)

会長： 次、5の府中の森芸術劇場だが、皆さんご存知のようにこれだけホールがあってということ。これについては芸術劇場を使っている委員から

何かあるか。生涯学習は広いので、芸術劇場が学習センターや文化センターと繋がったら面白いような取組があるか。

委員： 機能としては違うこともあると思うが、学びということでは共通なのではないか。ホールや大広間で開催されるものがあるってそれを見に行く、聴きに行くことで学ぶということはあると思う。

また、プロの方は別だろうが、市内で活動している団体が、ホールや大広間などで発表するための準備や練習では、生涯学習センターやプラッツを使っている団体も多いのではないかと思う。

会長： 練習の場所というのが、この芸術劇場だけでは足りないということか。

委員： 芸術劇場の中にも練習室はあるが、団体数は多いので、他の施設も併せて利用していくことになる。また、今は芸術劇場が改修工事で閉鎖しているため、会場の確保がより大変になっている。

会長： ハード面の話になるが、生涯学習センターが今後、新しくなったときに、音楽に限らず舞台系の練習室というのは、どれだけ確保されるかというのは実は大事な問題だ。

委員： 今は工事中だが、私もよくふるさとホールを使っていて、階段が入り組んで高齢者には厳しい。ますます高齢化してるので、できれば直してもらいたい。

会長： 次、6の市民会館はどちらかというと貸出施設というイメージが強い。自主事業としてコンサートやワークショップ、落語勉強会との講座も実施とはなっているが。

ルミエールは駅からの距離もいいので、この施設のことより次の博物館について皆さんの意見を聞きたいので、特になければ次にいきたい。

(意見なし)

会長： 次の7郷土の森博物館について、博物館としての活動というのは、本当に多彩だ。博物館としての機能以外に、場所としても色々なものがある。プラネタリウム、池、カフェもあって、実はここは大変使い勝手がいいと思う。

ただ、場所的にちょっと外れていることもあって、生涯学習センターと何か一緒にやっているというのはあまりないのではないか。生涯学習センターとの連携ということで何か思いつくことはあるか。そもそも使ったことあるか。

委員： プラネタリウムが少し前に新しくなった。郷土の森は3年生4年生が勉強で何度もお世話になっている。郷土の森博物館のやっている色々な勉強になることを、生涯学習センターでアピールする、広告するとか、そういうことがあると良いと思う。大変良い施設がたくさんある。

会長： 生涯学習センターとしてここで出前講座をやるということもあってもいいのかもしれない。確かに子どもたちが来やすい場所だと思うので、子どもたちとの繋がりという意味で、そこで例えば府中市について詳しい年配の方が講師をするような講座ができるのではないかと思う。生涯学習センターに子ども達が来るのではなく、郷土の森ならやりやすいこともあるのではないかと思う。子ども達との繋がりという意味で、生涯学習センターがうまくコーディネートして、市の様々ないろんな技術を持ってる方、知識を持ってる方が子どもたちに対して講座をやるということがあっても面白いかもしれない。

1から7までの施設について話してきたが、もう少し具体的にどのような連携があったら良いかということをお次回こちらから皆さんに提示をして、それについて意見をいただく時間を作りたいと思う。他には何かあるか。

委員： 施設の資料の最後、その他に青少年キャンプ訓練場やふるさと府中歴史館、熊野神社古墳展示館とマイナーなものもたくさん書いてあるが、例えばこの建物の6階に多摩交流センターがある。そこで多摩市民塾というのをやっていて、何回も来ているが、それは府中市民だけではないから載せていないのかとも思うが、参加者は市民が多い。

それから、私が毎日のように行ってるいきいきプラザが載っていない。生涯学習センターのトレーニングマシンは若者用で、いきいきプラザは高齢者用のマシンだから、高齢者はいきいきプラザに行った方がいい。なぜこの施設が載ってないのか。

会長： 福祉の施設ということで載せてはいない。

委員： そうなのかとも思うが、市民の立場からしたら生涯学習センターのトレーニングマシンと比較すると、高齢者だったら間違いなくいきいきプラザのトレーニングマシンの方がいいと思う。

委員： これまでの議論と関係するが、地区公民館では学習講座というのを運営している。これは社会教育法で設置された施設なので、それもやはり市内の公共施設、生涯学習に関連する市内公共施設として取り上げた方が良いと思う。

会長： 地区公民館は文化センターの中にある。なので、文化センターとの役

割ということで繋がっているという理解で良いか。

委員： こういうリストを作るならば掲げておいた方が良いのではないか。

会長： 最終的に答申をするときには、一緒に入れないといけない。

まだもう少し話ができる部分があるかもしれないので、今日の後半についての話については、皆さんから出されたものを整理してまとめる。その上で話し足りなかったこと、今日出てこなかった施設についても、生涯学習という視点で、学習センターと連携ができるのであれば入れていった方が良いということを次回話したい。

あと残されているのが生涯学習ファシリテーターとサポーター制度をどうするかということで、これについても話し合いをしなければいけない。

そろそろ答申の案を作っていく時期になっているので、次回話せるかどうかとも検討する。最後に副会長から一言お願いする。

副会長： 経験でキーワードを出すのはよくないかもしれないが、議論を聞いていて、どのような連携ができるのかという点については、学習者の学習リソースへのアクセス性なのだと思う。

データベースは個人の支払い能力を超えている。階段が辛いなどというのは個人の身体能力を超えている。司書が必要だというようなことは認知能力を超えている。

なので、個人の学習範囲リソースに手が届く範囲を超えたところに、おそらく公共が役割を果たすところがあるのだと皆さんの意見を聞いて思った。学習機会を創出するのは、個人では限界があるのでプラッツに行こうとか、どこかに行こうとか、そういった話にもなると思うし、学習課題の創出を個人で考えたところで大して出てくるわけではないので、みんなが集まるところに行こうというようなこと。

学習リソースをもう少し一般化したキーワードでまとめて、それを超えるところに公共が役割を果たす点があって、学習センターが持っている資源の範囲で届かないものは各施設とも連携をする、というまとめになるのではと思った。

次回、何か提示してまた話ができればと思う。

6 その他

- (1) 次回の審議会の開催時期について、令和6年7月23日（火）の午後2時から府中駅北第2庁舎3階会議室にて開催することで、了承を得た。